

アメリカ大都市の迷走

ジェイン・ジェイコブズは一介の主婦である、と言われているらしいが、そんな訳がない。権力を持たざる人物であることは間違いないが、彼女ほど行動力があって、問題の根本を追求しその解決のための立案や調査を惜しまず、時には狡猾ともいえる方法で突き進む人物はそういないだろう。一般人であるところの彼女が時の権力者に勝利した要因は果たしてどのようなものだったのだろうか。

1950年代のニューヨークには、ロバート・モーゼスという、市の都市計画の大部分（橋や交通網、インフラなど）を手がけ「マスター・ビルダー」とも称された男がいた。巧みな政略と鋭い専門知識によって、反論の隙を与えないほどの早さで数々のプロジェクトを実現していった。それは荒廃し手のつけられなくなった都市をまっさらにし、整然としたより良い生活を新たに生み出すものと考えられていた。一方で建築や都市を専門とするジャーナリストであったジェイコブズは近代都市化が急激に進むニューヨークにあって、既にその鋭い観察眼から良い都市には混合用途や雑多な界限などの、一見無秩序に見える多様性が必要であることを感じ取っていた。都市には人々の伝統的な生活が織り成す豊かさと再生能力があると。共にニューヨークを良くしようとする二人の登場人物は、既に最初の段階で全く異なるベクトルを持っていた。

二人の最初の衝突はワシントンスクエアパークであった。モーゼスはこの公園を半分に割って中央に車道を通し、大通りを延伸することによって、近代的な道路網と巨大住宅再開発事業の組み合わせる構想をしていた。言うまでもなくこの構想はジェイコブズが考える多様性を潰してしまうものであったが、同志の募集、計画の欠点の調査、嘆願書の作成と配布、地域メディアの動員など、決して派手ではなくそれだけで緻密な作戦の元に粘り強く行動した。そして時の州務長官をも動かし、モーゼスは計画を凍結せざるを得なくなった。

彼女の功績は、モーゼスの構想した自動車による単調な都市化を阻止したこともさることながら、一般市民の団結がトップダウン式の決定に屈しないという構図を実現したことにあるといえる。「ダウンタウンは人びとのものである」という彼女のスローガンが、上からの政策に対する住民のしこりを顕在化させた結果といえるだろう。その既存の常識に囚われない観察眼と権力に立ち向かう精神力には感服するほかない。この経験がきっかけとなり、ジェイコブズは「アメリカ大都市の死と生」を執筆することになる。新たに近代的な整備をし直すだけでは得られない、都市の多様性の必要を知らしめた1冊として世界的に有名となった。

その後も2大プロジェクトについてジェイコブズがモーゼスを退ける様子が描かれている。本書はタイトルのような勧善懲悪の物語に仕上がっている感はあるが、現在では訳者あとがきにもあるように長期的視点

に立った社会インフラの必要性からモーゼスの働きを再評価する動きもあるという。モーゼスが現在のニューヨークの骨格を築き生活の基盤を引き上げたことは事実であり、ジェイコブズ的な手法だけでは都市インフラそのものの寿命に対応できないことも予想されるのである。この新たな整備や開発を求めざるを得ないことがアメリカという国家の限界を示しているようにも思える。しかし、もしも第 2 のモーゼスとジェイコブズが奇しくも同時に出現することがあるとすれば、今度は手を取り合って開発だけでも保全だけでもない新たなパラダイムで世界を率いる日が来るのかもしれない。